認知意味論的観点からの「切る」の意味構造分析

森 山 新*
moriyama.shin@ocha.ac.jp

<要　旨>

動詞「切る」の意味構造について、認知意味論的観点から分析を行った。その結果、「意志を持った人が、刃物のような道具を使って、一続きの物を、力を加えて分断する」という意味を中心義とし、メトニミーやメタファーという動機づけにより、11の語義へと拡張が起きている。さらに11の拡張義のうち、いくつかはさらに拡張義を派生させている。

キーワード： 基本多義動詞 切る 意味構造 認知意味論

1. はじめに

言語において構文を決めるのは述語であり、そのほとんどが動詞文であることを考えると、動詞の習得は母語習得においても、第二言語習得においても重要である。中でも基本動詞と呼ばれる動詞はその使用頻度も高く、その重要性はさらに増すが、一方で基本動詞のほとんどは様々な意味用法を有する多義語であり、中心義の習得は容易なものの、それ以外の語義（拡張義）は学習段階が上がっても習得されないまま終わってしまうことも少なくない。多義基本動詞の様々な語義（拡張義）は、中心義を中心に意味のネットワークを構成しながら一つのカテゴリーとしてまとまっている。ある語義から他の語義への拡張関係は様々な動機づけによりなされているが、その動機づけを知り、かつ理解できなければ、その動詞の意味のネットワーク全体を理解し習得することは、学習者にとって容易でないのである。とりわけ母語習得と異なり、第二言語習得においては、限られたインプットの中で、様々な意味用法で用いられる基本動詞の各々の語義の多様性の全貌と、各語義間の拡張関係を理解し、最終的に母語話者が有しているような意味カテゴリーを構築する必要があり、それは学習者にとって非常に困難な作業となる。今井（1993）では、日本語を母語とし、英語を第二言語とする学習者がwearを習得する際に、その多義の一つ一つの語義をつなげ、一つのカテゴリーにしている拡張関係の理解ができず、カテゴリー全体を理解して習得していくことがいかに困難であるかを示している。

英語のwear同様、日本語の「切る」も基本動詞の一つであり、多義語である。そしてwear同様に中心義を覚えることは容易な反面、その意味の広がりの多様さから、学習段階が進んでも多義の一つ一つを習得できずに終わることが少なくない。本研究では、この多義基本動詞の一つ「切る」を取り上げ、その多義構造を明らかにし、それぞれの拡張義がどのような動機づけのもとに意味拡張が起

* お茶の水女子大 教授

き、一つのカテゴリーを形成しているかについて明らかにしたい。

2. 先行研究

動詞「切る」の多義研究には大きく、本動詞「切る」の多義を扱った研究（許2008、遠藤2008）と、複合動詞「切り～」「～切る」の多義を扱った研究（李1997、杉村2008）とに分類できる。本稿は本動詞を扱うため、ここでは許（2008）、遠藤（2008）について概観する。

許（2008）は、本動詞「切る」を７つの別義に分け、その多義構造を分析している。それによると、中心義（別義１）は、(1)のようなものであるとしている。

(1) ＜人間・動物が＞＜一続きにつながっている＞＜固体に対し＞
＜集中的な力を加えて＞＜力を加えた位置で＞＜分離する＞

ここで問題となるのは、動詞の意味を分析するにあたって共起する項についての配慮がなされていない点である。許が別義１で挙げている例文は、

(2) 花子がナイフでパンを切る。

であり、項としてガ格、デ格、ヲ格が共起している。「花子」が動作主でガ格、「ナイフ」が道具でデ格、「パン」が非動作主でヲ格によって表されている。しかし(1)の意味記述では、ガ格は＜人間・動物が＞と1つの意義素で記述されているが、ヲ格は＜一続きにつながっている＞＜固体に対し＞と2つの意義素で示されている。さらにデ格に対応する意味記述はなく、その代わりに、＜集中的な力を加えて＞＜力を加えた位置で＞が意味記述に加わっている。許（2008）では、その理由を刃物のような道具を必要とせず、デ格を共起しない用法（以下の(8)(9)のような用法）もあるためとしているが、実際に様々な「切る」の事態を考えた場合に、その多くは刃物のような道具を必要とすることのほうが多い。また＜集中的な力を加えて＞＜力を加えた位置で＞は項で示されていないことから、文脈的意味か、もしくは百科事典的意味と考えるべきであり、項で示されることの多い、刃物のような道具に比べるとその重要性は高いとは言い難い。意味記述にとってより重要な、デ格で表される項に関する意味記述がないのは問題であろう。

このように許（2008）では、「切る」の意味分析にあたり、動詞にとって重要な項についての配慮が不足しており、かつそれ以上に文脈的意味や百科事典的意味を考慮して語義の認定や分類を行っているため、意味分類や意味記述にぶれが生じてしまっている。

ただし、(2)が「切る」の中心的用例であるという点は、おそらくだれも異論がないであろう。であるとすれば、中心義の意味記述を共起する項（ガ格、デ格、ヲ格）を意識して書き直すなら、以下の(3)のようになると思われる。「切る」は意志動詞であるためガ格は「（意志を持つ）人」とした。も

ちろん許で「人間・動物」としているように、ガ格になるのは人以外の動物も含まれるが、典型的には道具を使うことができる人であるため、ここではあえて人としている。また「力を加えて」は動詞の意味の一部と考え、また「分離する」では「刃物などの道具」を使わない分離も含まれ、意味が広くなりすぎるため、「（力を加えて）分断する」とした。

(3) ［（意志を持つ）人］が・［刃物などの道具］で・［一続きの物］を・［（力を加えて）分断する］

遠藤（2008）では「～を切る」の意味用法を「～を割る」と比較しつつ分析している。この研究では、「切る」のスキーマは(4)のようなものであるとしている。

(4) 一続きのものを力を加えて離れた状態にする

「切る」は「N1がN2をV」の構文をとり、N2の意味範疇により以下の(5)の6つに分類している。ここで問題なのは、「切る」の多義がヲ格の意味範疇のみによって分類されている点である。もちろん、他動詞にとってどのような目的語を取るかは意味記述にとって最も重要である。しかし、他動的な事態は典型的には動作主、被動作主を表すガ格、ヲ格を必須の項とし、道具を表す項が共起することも多いことを考えると、ヲ格のみをもって意味分析を行うのは疑問が残る。また［Ⅵ］としてその他を設け、先行研究で見解が分かれることを理由にして分類を保留してしまっている点である。見解が分かれるからこそ、自身の見解を述べるべきであって、この点も問題が残る。

(5)

［Ⅰ］N2が固体の具体物の場合。
[a]一続きのものを、刃物などを用いて離れた状態にする。「大根を～」
[b]対象物が分離しない。「手を～」
[c]（N2が人の場合）殺す。「罪人を～」
[d]（N2が臓器の場合）外科手術を行い切って取り除く。「胃を半分～」
[e]（N2が袋状の物の場合）切って開ける。「封を～」
［Ⅱ］N2が液体や気体の場合。道具は現れない。
[a]空気や水の中を突き進むように動く。「風を～」
[b]付着した水分・油分を何らかの方法で取る。「野菜の水を～」
［Ⅲ］N2が人や組織の場合。
[a]隠された内容を外に出す。「世相を～」
[b]除く。捨て去る。「反対するものを～」
［Ⅳ］N2が（近くでは捉えにくいが）つながっている状態のもの
[a]一続きのものを力を加えて離れた状態にする。「電源を～」「縁を～」

[b]（N2が時間的に継続する事態）休止・中止する。「いったん話を～」
[c]（N2が時間そのもの）休止・中止する。「期限を～」
[Ⅴ]N2が数値の場合。ある数値を下回る。「目標の11秒を～」
[Ⅵ]その他の場合「小切手を～」「啖呵を～」「十字を～」「ハンドルを～」「口火を～」

以上の先行研究から、本稿では、「切る」の典型的な用例が共起する項全体（ガ格、デ格、ヲ格）を見渡し、それをもとに、意味分析を行い、その多義構造について考察することを目的とする。研究課題は以下のとおりである。

RQ1　「切る」の中心義はどのようなものか
RQ2　「切る」の拡張義にはどのようなものがあるか。それらはどのような動機づけによって拡張したと考えられるか。

RQ1については3.1で、RQ2については3.2で扱う。なお本稿で、RQ1の中心義とは、拡張義の起点となり意味カテゴリーの中心となる語義であり、認知言語学でいうプロトタイプの語義をさすこととする。またRQ2で＜0＞からの拡張義は＜1＞、＜2＞で表すことにする。但しそれら中心義、または拡張義から拡張した下位の語義は＜0a＞、＜1a＞、＜1b＞などとアルファベットを付して表すことにする。

3.「切る」の意味分析

3.1. 中心義

先行研究で述べたように、「切る」の中心義＜0＞は(6)のようなものとなる。共起するガ格は「［（意志を持つ）人］が」とした。これは「切る」が意志動詞であるためである。さらに、［刃物などの道具］を用いることが典型的であると考え、それを用いない場合を中心義から除外し、デ格の意味記述も加えた。

(6)中心義＜0＞［（意志を持つ）人］が・［刃物などの道具］で・［一続きの物］を・［（力を加えて）分断する]

例文としては、(7)のようなものが考えられる。例文(2)では「パン」がヲ格であったが、「パン」は必ずしも一続きの長い物ではなく、一続きの物の典型とは考えにくいため、ロープに変えた。

(7)花子がナイフでロープを切る。

ただし、許（2008）で指摘されているように、ガ格、ヲ格は必須の項であるのに対し、デ格は必ずしも必須ではなく、以下のような例も考えられる。

(8)太郎が両手で引っ張って糸を切る。
(9)犬が鎖を切って逃げた。

しかし、これらは「切る」の典型的事態とは考え難いため、これを中心義から拡張した下位カテゴリーと考え、＜0a＞とする。

(10)　＜0a＞［＋刃物などの道具］→［－刃物などの道具］

ここで、→は意味拡張を示す。したがって(10)は［刃物などの道具］がある典型的事態からそれがない事態へ意味拡張が起きたことを示している。

3.2. 拡張義

認知意味論では、拡張の動機づけとして、これまでメタファー、メトニミー、シネクドキの3通りに分類することが多い。本稿でもこれを採用することにする。

メタファー、メトニミーとシネクドキは従来、修辞学の領域に関わるレトリックとされてきた。これに対し、lakoffやJohnsonは、メタファーは単なるレトリックではなく人間の基本的な認知能力の１つであるとされた。認知意味論ではさらに、これを語義の意味拡張を動機づける要因と考えた。メタファー、メトニミー、シネクドキの定義は以下の通りである（松本 2003)。

(11)

メタファー：２つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩。

メトニミー：２つの事物の外界における隣接性、さらに広く２つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩。

シネクドキ：より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表す比喩。

例えば、(12)の「切る」は中心義の「ナイフでロープを切る」のように、「トランプ」を「分断」してはいない。「トランプ」を混ぜる姿が、「切る」姿に類似しているのである。このような意味拡張は、類似性、すなわち「メタファー」を動機づけとしたものであると考えることができる。

(12)トランプを切る。

これに対し、(13)の「切る」は中心義の「ナイフでロープを切る」のと同様に、封筒を刃物などの道具で「分断」している。しかし中心義と異なるのは、単に分断するだけでなく、開封し中の物を取り

出している点であり、かつ意味的には後者のほうに焦点が移動している点である。このように隣接するものへ焦点が移動し、意味変化が生じているため、この場合の意味拡張は隣接性による「メトニミー」である。

(13)手紙の封を切る。

「切る」の意味拡張ではシネクドキを動機づけするものが見当たらないため、ここでは具体例を挙げることは省略する。

3.2.1. メトニミー

メトニミーによる意味拡張によって生じた意味としては以下のようなものがある。それぞれ、中心義が持っている、「人が刃物などの道具で一続きの物を分断する」という意味はそのまま受け継がれているものの、新たな意味が付加され、そちらに意味の中心が移動しているものである。

＜1＞［密封した物］を・［分断する］＋開ける

［密封した物］とは、開封部分が「一続き」に接合されている物であり、［一続きの物］の拡張と考えることができる。(14)のように、［一続きの物］が［密封した物］となると、「切る」は［分断する］だけでなく、それを「開ける」ことを意味するようになる。

また「火蓋を切る」という慣用句があるが、これも「開く」の意味になっており、これに含まれよう。

(14)手紙の封を切る。

＜2＞［患部］を・［分断する］＋治療・手術する

［幹部］は、健康な部分と病んでいる部分とが「一体」となっており、［一続きの物］の拡張である。(15)のように、［一続きの物］が［患者の幹部］となると、「切る」は［分断する］だけでなく、その後に「治療」したり、「手術」したりすることを含意するようになり、意味の焦点はそちらのほうに移動する。

(15)胃を半分切らないといけない。

＜3＞［人］を・［分断する］＋殺傷する

(16)のように、［一続きの物］が［人］になると、「切る」は人のある（一続きであった）部分を切り裂き、［分断する］ことで、「殺す」ことを意味するようになる。また(17)の場合には、もちろん指を切断するという意味になる場合もあるが、通常は、［一続きの物］は「皮膚」であり、皮膚などを分離させ、傷つけることを意味するようになる。

(16)敵を斬る。
(17)手の指を切ってしまった。

＜3＞の意味は、さらに［刃物などの道具］を使って、［分断する］のではなく、類似性、すなわち「メタファー」により意味の抽象化が起き、以下のような意味拡張が起きる。これについては後述する。

＜3a＞［殺傷する］→［辞職させる］
＜3b＞［殺傷する］→［批判・断罪する］

＜4＞［書類］を・［分断する］＋発行する
ここでの［書類］とは、発行する際に、切り取り線にそって分離して発行する、領収書や切符などの書類である。(18)のように、［一続きの物］がそのような［書類］になると、「切る」は［分断する］ことで、「発行する」ことを含意するようになり、意味の焦点はそちらに移動する。なおかつては領収書を発行するために、はさみやナイフなどで書類を切り離していたかもしれないが、今日では切り取り線があり、特に刃物を必要としなくなったためデ格が共起することはない。遠藤（2008）で例外扱いされていた「小切手を切る」もここに含めることができる。

(18)領収書を切ってください。

3.2.2. メタファー

以下の用法は、中心義のように、実際に［刃物などの道具］を用いて、「一続きの物」を［分断する］ことはないが、類似した動作になっている用法である。これはある動作を、その類似性から「切る」動作に見立てられているわけである。この類似性は、ヲ格で表されたものが何らかの意味で「一続き」であり、それを「切る」動作と同じように、力を加えて、分断する動作であるためである。

＜3a＞［殺傷する］→［辞職させる］
(19)では、＜3＞の［殺傷する］という意味が、［辞職させる］という意味に拡張している。これは「職場は戦争である」という概念メタファーのもとで、「戦争で首を切る」ことが「相手の命を絶つ」ことを意味するのと同様に、「職場で首を切る」ことは「職場での命を絶つ＝辞職する」を意味することへ意味が拡張したものである。

(19)一部の社員の首を切った。

＜3b＞［殺傷する］→［批判・断罪する］
(20)では、＜3＞の［殺傷する］という意味が、［批判・断罪する］という意味に拡張している。これは「社会は戦争である」という概念メタファーのもとで、「戦争で相手を切る」ことが［殺傷する］

ことを意味するのと同様に、「社会で相手を切る」ことは［批判・断罪する］ことを意味することへ意味が拡張したものである。なお、＜3＞では「刃物などの道具」が用いられるが、＜3b＞ではそれに代わり、「鋭い言説」が用いられ、それがデ格で示される場合がある。

(20)痛烈な言葉で官僚の腐敗を斬る。
(21)世相を斬る。

＜5＞［水・空気］を・［分断する］＋移動する
(22)(23)では、［水・空気］を連続するものとしてとらえ、移動する際にそれを［分断する］ように分け進むことが必要なために「メタファー」が生まれ、意味拡張が起こったものである。ただし厳密には、「分断」した後に前に「移動する」ため、メタファーだけでなく、メトニミーも加わっている。

(22)一隻の船が波を切って進む。
(23)走者が風を切って走っていった。

＜6＞［人］が・［一続きの物］を・［分断する］→［数値］が・［基準の数値］を・［分断する］＋移動する＝減少する
さらに(24)では、「分断」の意味が本来の「刃物による具体的な物の分断」から、「変化を表す線が、基準線を縦断すること」へと変化している。さらにここでは「分断」に「移動」という意味が加わっており、「減少」という意味に変化している。これはグラフ上で、変化
を表す［数値］がある［基準の数値］を割り込む場合には、その基準を示した横線を「分断」し、さらに下降を続けるためで、基準線を分断する様子を、「切る」に見立てているわけである。なお、ここで主語（ガ格）は、本来の［（意志を有する）人］から、［数値（を表すグラフ）］へと変化している。また拡張の動機づけとしては、「縦断」を「分断」に見立てる「メタファー」と、「分断」に「移動」が加わり、「減少」の意味へと変化する「メトニミー」が作用している。

(24)100mのタイムがついに10秒を切った。

＜7＞［一続きの物］を・［分断する］→［目標・限界］を・［分断する］＋移動する＝超過する（完全に～する）
また(25)(26)では「切る」が複合動詞で用いられている用法であるが、「分断」は、人が「ある目標や限界線を横断して越える」という抽象的な「分断」に意味変化している。さらに「移動」の意味が加わっており、「（目標・限界の）超過」を意味している。何かを完全に行ったり、ある状態に完全に達したりする場合には、ちょうど走者がゴールラインを越えるように、ある目標線・限界線を越えるからである。拡張の動機づけとしては、＜6＞同様、「縦断」を「分断」に見立てる「メタファー」と、「分断」に「移動」が加わり、意味変化する「メトニミー」が作用している。

(25)一晩で本を 1 冊読み切ってしまった。
(26)彼は疲れ切った顔をしている。

＜8＞［一続きの物］を・［分断する］→［つながり］を・［分断する］
(27)～(29)では、［一続きの物］を［分断する］ことが、［つながり］を［分断する］ことへと意味が拡張している。「分断」は可視的で具体的な物の分断から、電流、音といった不可視的なものの分断へと抽象化しているため、メタファーである。遠藤では(27)(28)と(29)を分け、前者は空間的に一続きのもの、後者は時間的に継続する事態としているが、どれも空間的、時間的な連続性があり、両者を区別することは難しいと考え、ここでは同じカテゴリーとした。

(27)電気を切る。
(28)電話を切る。
(29)長い文を切って読む。

また遠藤で対象から除外されていた。「十字を切る。」などもこのカテゴリーに含まれるであろう。

＜8a＞［つながり］を・［分断する］→［関係］を・［分断する］
さらに(30)では、平面的な［つながり］を、「メタファー」により［（人間的・精神的な）関係］へと拡張させている。遠藤では(30)は(27)(28)と同一のカテゴリーとしているが、これは精神的なつながりであるため、本稿では分けることにした。

(30)親子の縁を切る。

＜9＞［一続きの物］を・［分断する］→［不要な部分］を・［分断する］＋除去する
(31)(32)では、「分断」に「除去」の意味が加わっている。(31)では、天ぷらとそこに含まれた油とが一体となった状態を［一続きの物］と見立て、それを「分断」し、不要な油を「除去」するという意味になっており、ヲ格も「一続きの全体」から、「一続きの全体の一部分」すなわち［不要な部分］がヲ格で表されるように変化している。同様に(32)では野菜とそこについた水分とが一体となった状態を［一続きの物］と見立て、それを［分断］し、不要な水を［除去］するという意味になっており、ヲ格も「一続きの全体」から「一続きの全体の一部分」、すなわち［不要な部分］がヲ格で表されている。ここでは、油や水を分断・除去する動作が、「切る」に似た動作として見立てられる（メタファー）とともに、分断した後、除去するというメトニミー的な意味拡張も起きている。さらにヲ格で表現されていたものが全体から部分へと移動しており、ここでもメトニミー的な意味拡張が起きている。

(31)天ぷらの油を切る。
(32)ざるで野菜の水を切る。

＜7a＞［不要な部分］を・［分断する］＋除去する→［未練など］を・［分断する］＋除去する
さらに＜7＞は［不要な部分］の「除去」の意味が「メタファー」により抽象化し、断ち切れない［未練など］の「除去」へと意味変化している。

(33)彼女への未練を切って捨てる。

＜8＞［分断する］→［力強く瞬間的動作を行う］
(34)(35)では、［分断する］という意味が［力強く行う］へと意味拡張している。「切る」行為は「力を込めた瞬間的動作」であるが、(34)(35)の動作もそうで、「力を込めた瞬間的動作」を、「切る」に見立てたのである。(36)～(38)では、用いられる力が物理的力ではなく、精神的なものとなっている。遠藤で例外扱いしていた、(34)(37)(39)はここに含まれる。(39)は火縄銃の口火を火皿に強く押し付けるさまを、「切る」に見立てたものである。

(34)ハンドルを右に切る。
(35)カーブを切る。
(36)見えを切る。
(37)啖呵を切る。
(38)しらを切る。
(39)口火を切る。

＜9＞［一続きの物］を・［分断する］→［カード］を・［分断する］＋混ぜる
(40)では、「カードをばらばらにして混ぜる」動作を「切る」動作に見立てている。これは、カードを混ぜる際、最初に行われる動作が、カードの束に切り込みを入れるような動作であるため、視覚的に「切る」動作に類似していることと、カードを混ぜる目的が、一続きのカード、例えばハートの6、7、8を「分断」し、ばらばらにすることであるという、「一続きの分断」であり、その意味でも「切る」行為と似ていることによる。したがってここでの動機づけは、「混ぜる」動作を「切る」動作に見立てるというメタファー、「分断して、その後混ぜる」というメトニミーの両方が作用している。

(40)トランプをよく切ってから配った。

4. まとめ：「切る」の意味構造

以上「切る」の意味分析を行ってきた。中心義、及び拡張義とその動機づけをまとめると以下のようになる。ただし「メト」「メタ」はそれぞれ「メトニミー」「メタファー」の略である。

＜0＞［（意志を持つ）人］が・［刃物などの道具］で・［一続きの物］を・［（力を加えて）分断する］

花子がナイフでロープを切る。

＜0a＞［＋刃物などの道具］→［－刃物などの道具］

太郎が両手で引っ張って糸を切る。犬が鎖を切って逃げた。

＜1＞［人］が・［密封した物］を・［分断する］＋開ける（メト）

手紙の封を切る。

＜2＞［人］が・［患部］を・［分断する］＋治療・手術する（メト）

胃を半分切らないといけない。

＜3＞［人］が・［人］を・［分断する］＋殺傷する（メト）

敵を斬る。手の指を切ってしまった。

＜3a＞［殺傷する］→［辞職させる］（メタ）

一部の社員の首を切った。

＜3b＞［殺傷する］→［批判・断罪する］（メタ）

官僚の腐敗を斬る。世相を斬る。

＜4＞［人］が・［書類］を・［分断する］＋発行する（メト）

領収書を切ってください。

＜5＞［人］が・［水・空気］を・［分断する］＋移動する（メタ・メト）

一隻の船が波を切って進む。走者が風を切って走っていった。

＜6＞［数値］が・［基準の数値］を・［分断する］＋移動する＝減少する（メタ）

100mのタイムがついに10秒を切った。

＜7＞［人］が・［目標・限界］を・［分断する］＋移動する＝超過する、完全に～する（メタ）

一晩で本を1冊読み切ってしまった。彼は疲れ切った顔をしている。

＜8＞［人］が・［一続きの物］を・［分断する］→［人］が・［つながり］を・［分断する］（メタ）

電気を切る。電話を切る。長い文を切って読む。

＜8a＞［つながり］を・［分断する］→［関係］を・［分断する］（メタ）

親子の縁を切る。

＜9＞［人］が・［一続きの物］を・［分断する］→［人］が・［不要な部分］を・［分断する］＋除去する（メタ・メト）

天ぷらの油を切る。ざるで野菜の水を切る。

＜9a＞［不要な部分］を・［分断する］＋除去する→［未練など］を・［分断する］＋除去する（メタ）

彼女への未練を切って捨てる。

＜10＞［人］が・［分断する］→［人］が・［力強く瞬間的動作を行う］（メタ）

ハンドルを右に切る。カーブを切る。見えを切る。啖呵を切る。

しらを切る。口火を切る。

＜11＞［人］が・［一続きの物］を・［分断する］→［人］が・［カード］を・［分断する］＋混ぜる（メタ・メト）

トランプをよく切ってから配った。

また、この結果を共起する項別に表にまとめたものが表１である。これを見ると、「刃物などの道具」を表すデ格は、中心義0、及びメトニミーで拡張した1、2、3では共起している（4は本来刃物が必要であったであろうが、今日では刃物なしに書類を切って発行が可能なため、デ格の共起が起きない）が、メタファー的拡張によって生まれが拡張義では実際に「刃物などの道具」による分断は行っていないため、デ格の共起は見られなくなっている。

このように「切る」は「意志を持った人が、刃物のような道具を使って、一続きの物を、力を加えて分断する」という意味を中心義とし、そこからメトニミーやメタファーという動機づけにより、11の語義へと拡張が起きている。さらに11の拡張義のうち、いくつかはさらに拡張義を派生させていることがわかった。

表１　「切る」の意味構造

		ガ格	デ格	ヲ格	動詞
0		人	刃物などの道具	一続きの物	分断する
	0a	人		一続きの物	分断する
1		人	刃物等の道具	密封した物	分断する＋開ける
2		人	刃物等の道具	患部	分断する＋治療・手術する
3		人	刃物等の道具	人	分断する＋殺傷する
	3a	人		人	辞職させる
	3b	人	（鋭い言説）	人・社会	批判・断罪する
4		人	（刃物等の道具）	書類	分断する＋発行する
5		人		水・空気	分断する＋移動する
6		数値		基準の数値	分断する＋下降する
7		人		目標・限界	分断する＋移動する
8		人		つながり	分断する
	8a	人		関係	分断する
9		人		不要な部分	分断する＋除去する
10		人			力強く瞬間的動作を行う
11		人		カード	分断する＋混ぜる

本研究はあくまでも一人の日本語母語話者（著者）が認知意味論の理論と内省とによって行った分析である。この意味分析が先行研究と異なることは、研究者により分析の結果が必ずしも一致しないことを意味している。今後はこの意味分析の妥当性を、今井（1993）や森山（2011）で用いられたカード分類法などの方法により、検証していければと考えている。

また本研究は、森山編著（2012）を編纂するために行った意味分析研究のうち、「切る」についてまとめたものである。この研究がいかに辞書開発につながったかについては森山編著（2012）を参照頂きたい。

◀ 参考文献 ▶

李暻洙(1997) 「前項動詞『切る』、後項動詞『～切る』と関連づけて」『世界の日本語教育』72, 19−232.

今井むつみ(1993) 「外国語学習者の語彙学習における問題点－言葉の意味　表象の見地から－」『教育心理学研究』41, 245−253.

遠藤裕子(2008) 「「割る」と「切る」の意味拡張―数値・数量を表す用法―」拓殖大学語学研究第117号, 57−80.

許永蘭(2008) 「「切る」の多義分析」『言葉と文化 』9, 303−320. 古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻

杉村泰(2008) 「複合動詞「－切る」の意味について」『言語文化研究叢書』 7, 63−79 名古屋大学大学院国際言語文化研究科

松本曜(2003) 『認知意味論』、大修館書店.

森山新(2011) 「「出す」の意味構造に関する実験的研究：日本語学習辞典の開発のために」『日本認知言語学会論文集』11, 277−286.

森山新編著(2012) 『日本語多義語学習辞典：動詞編』、アルク

森山新、荒川洋平、今井新悟(2009) 「認知言語学的観点からの日本語学習辞典を考える」日本語教育国際シンポジウム(ポスター発表)